三上人とその時代

藤原弘道

「保元元年七月二日鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本國ノ亂逆ト云コトハヲコリテ後、ムサノ世トナリニケル也。」（愚管抄）とは慈鎭和尙の時勢觀であるが、更に「保元ノ亂以後ノコトハミナ亂世ニテ侍レバワロキ事ニテノミ云云」と觀察してゐる。北畠親房も「白河・鳥羽の御代のころより政道の古き姿やうゝ衰へ、後白河の御時、兵革起りて姦臣世を亂り、天下の民殆んど塗炭に落ちにき。」（神皇正統記）といつてゐるやうに、保元平治の兵亂は、正に武門興隆による時勢の轉換時であつた。藤原氏一族による攝關政治の政治機構は、平安末期に於ける政治の紊亂と社會の行き詰りとを改造し、政局を收拾せんとするの實力を失ひ、その爲め院政が始められたが、それとても政治の常態ではなく、かへつて新興の武家に漁夫の利を得せしめるの結果を招來した。社會の指導的地位にあつた公家及び僧侶が、政治的にも經濟的にもその權威を失ひ、社會人心から離反されるや、それらの階級の人々は、武家の世を亂逆の世と卑むと共に、落日の如き自己の姿を觀照しては、たゞ公家文化華やかなりし過去の時代を謳歌し、未來に對し不安と憂鬱とを感じたのである。延喜天曆の古を追慕すると共に、現實は末法、澆季と失望の感を懷き「何事も古き世のみぞ慕はしき、今樣は無下に卑しくこそなりゆくめれ。」（徒然草）とたゞ上代の生活を思慕し、さては、「かの木の道の匠の作れる美しき器物も古代の姿こそおかしと見ゆれ、文の詞などぞ昔の反古どもはいみじき」と、器物や詞の如きまで古代のを憧れた。かくて

奈良の佛教が復興せられ、萬葉や古今、さては源氏の如き文學が尊重されるに至つたのである。

然し、かくまで後の世から慕はれた青丹よし奈良の都の古にも、既に地方官の非法なる課役に對する地方民の怨嗟の聲あり、「メデタク德政ヲオコナハレケレバ、中略、大寶年號始リテ後タヾコノ御時ヲノミアフグナルベシ。」（愚管抄）といはれる延喜天曆の聖代でさへ、地方では承平天慶の亂があつて物情騷然たるものがあつた。貴族が莊園の富を擁して、儚い享樂に日を送るうちは、天下太平であつても、一度沒落の日が來り、彼等の莊園も武士の手によつて保護せられるに至つては、その無力の哀れさは想像以上である。すべては前代からの繼承であり、前例によらねばならぬ王朝貴族の生活に、清新な氣を見出し得べくもなく、從つて新らしき文化を產むべき力も發展性もなくなるこ、あたら古の文化に纏々たるも不思議はない。田舍ものはいやしこ卑下した都鄙文化の懸隔は、王朝文化の華やかな時のことで、武士階級の勃興は地方の勢力が京都を壓倒したことである。地方の豪族は强い力の所有者であるばかりでなく、經濟的基礎も確實なものであるだけ抑へ難い勢力を有してゐる。今昔物語卷二十七に、「東の方より榮爵尋て買はんこ思て京に上たる者」の話があるが、財力の豊富なるに委せ、京都に官職を求めんことを希望した地方武士の樣子が察せられる。

さて武家社會の指導的地位に立つものは、いふまでもなく、源平兩氏である。その昔、源頼義が前九年の役に、奥羽に於ける阿倍貞任、重任等の浮囚の首を京都に進めた時、縉紳縉素は珍らしきものを見る如く群集したことは有名であるが、（水左記）公家は武家を蔑視してゐたことも事實である。抑々武家の一人、平清盛が從一位太政大臣に進み、その女を中宮に奉り、一族高位高官を占め、一門の莊園五百餘ヶ所に及ぶに至つては、（平家物語）何人も驚嘆せざるを得ない。一體下臈人こして卑下し、公家達が同席するさへ心よく思はなかつた平氏が、忠盛に至つて始めて昇殿を許されたことさへ非常な異變こされたことを思へば、思ひ半に過ぎるものがある。然し平氏の武家政治はたゞ藤原氏の舊套を踏

襲した外、何等新らしき意義を有しないのを以てすれば、屋島、壇の浦の海戰を待たずして滅ぶべき前途は當然の歸決といふべきである。

王朝貴族や、平家の公達の生活は華美艶麗ではあつたが、それらから吾々の味ふものは、その華やかさよりも、かへつて悲愁哀愁といつた暗い寂しい味であるのは何故であらうか。無常有爲轉變の世の有樣を以て、人生を朝露にたとへた方丈記の作者鴨長明ばかりでなく、平家物語の作者にしても同感であるが、たゞ單なる文學的表現のみでなく、事實その朝顏の露の凋落よりも哀を止めたのは平家の都落ちや、西海漂泊の現實であつた。當代文學によくいはれる「ものゝあはれ」といふ人生觀照の標準は、單に文學の一特徵であるばかりではない。こにかく弱い平民が滅んで、强い源氏が鎌倉に幕府を開くことによつて、武士の生活環境にも大變化を致した。然し源氏とても、賴朝の興隆的なのに對し、賴家、實朝に至つてはあまりにも微力で、遂に鶴ヶ岡八幡宮社頭の一變に脆くも三代で終つた。これに續く北條氏は京都の公家から幼い將軍を迎へ、事實上の權を握つたが、承久の變の如き公武の正面衝突を來した。武家政治は大義明分の上からは勿論その非難を免れぬが、流石は武士である。元寇國難に際し、その勇猛果斷な精神氣魄は、見事之を退け、外夷の侮を受けることはなかつた。

こうした目ぐるましい、變遷多い時代を背景として出現したのが、我が鎭西、勢觀、記主の三上人であつた。

抑々中古に於ける社會の指導原理は佛敎である。而して鎌倉佛敎の大立物は地方出身が多い。法然上人は美作、一遍上人は伊豫、榮西禪師は備中、日蓮上人は安房、鎭西上人は九州、記主上人は石見から出てゐる、これらをみても求道の機緣が單に京都のみに限らず、かへつて、一般地方の人々の心の中に熟してゐたことを知るのである。旣に藤原淸衡が平泉に中尊寺を建立し、當時の文化を今に偲ばしめてゐるが、これとても此地方人の心を離れて考へることは出來な

い。こゝに都の佛教の地方的傳播を知るのである。（竹岡勝也氏日本文化史平安朝末期參考）

さて鎭西上人は二條天皇の應保二年に生れ、四條天皇の曆仁元年、七十七歳を以て歿した。勢觀上人は安德天皇の壽永二年に生れ、鎭西上人と均しく曆仁元年、五十六歳を以て歿し、記主上人は土御門天皇の正治元年に生れ、後宇多天皇の弘安十年に八十九歳の高齡を以て歿した。されば鎭西上人は、幼時保元平治の源平爭覇の亂に遭ひ、その長ずるや、源家三代、幕府の興亡、承久の變にも遭遇した。勢觀上人は平家の末期に生れ、鎭西上人とほゞ時代を同じうしてゐる。記主上人は賴朝薨去の年に生れ、承久の變は勿論、文永、弘安兩度の元寇國難にも遭遇した。

鎭西上人が吉水に宗祖の門を叩いたのは建久八年で、宗祖六十五歳、鎭西上人三十六歳の時であつた。以後常隨八年、宗祖をわが大師釋尊と尊敬し、宗祖も亦愛弟中の隨一として選擇集を附屬せられた。宗祖の滅後は、鎭西上人が「諍其義於水火、致其論於蘭菊、」（授手印序文）といつてゐるが如く、隆寛、證空、幸西等の異義續出、宗祖の眞意那邊にあるかの觀を呈したが、鎭西上人よくそれらの邪義を排し、正法の宣布に努めた。鎭西上人の教化は鄕黨鎭西の地に行はれ安貞二年肥後往生院に於て末代念佛授手印を述作し、（勅傳、授手印裏書）その後筑後の善導寺を中心に念佛の教化に精進した。

鎭西上人の九州布教に對し、記主上人は關東の地方に法莚を敷いた。記主上人の傳法は、鎭西上人授手印製作後九年、卽ち嘉禎三年で鎭西上人七十六歳、入滅の前年であり、記主上人三十九歳の時である。建長の初より關東の地に入り、下總を中心に念佛を興隆し、諸寺建立、多數の著述を殘して鎌倉に轉じた。（然阿上人傳、今岡晉氏記主禪師年譜考「淨土學第四輯」、惠谷隆戒氏然阿良忠上人傳の新研究等參照）當時鎌倉は幕府の所在地であり、京都に次ぐ文化の中心であつた。然も建長寺圓覺寺等の禪宗寺院には蘭溪、祖元の如き輩出して禪佛教の沿叢をなし、その他忍性菩薩良觀の化導、日蓮上人の

法華信仰等、一時鎌倉は宛然佛教都市の如き觀を呈した。禪宗が武士階級に尊ばれたのに對し、淨土教は庶民の間に行はれた。たゞへ鎭西上人から「欲報我恩、都鄙遠近、弘淨土教、勸念佛行、」（然阿上人傳）といはれたとはいへ、關東への弘通は淨土宗初期教團建設者として、偉大な功績といはねばならぬ。然も領解末代念佛授手印鈔、三心私記、淨土宗要集等上人の數多き述作も實は教化多忙のうちに執筆せられたもので、その宗學に深きこと、眞に驚嘆の至りである。それにしても、鎭西、關東の地と雖も、新佛教に對し、之を理解し、之を享受するだけの素地を有してゐたことが察せられる。

勢觀上人は社會的にはあまり有名ではなかつたが、至極純な求道者であつた。源頼朝再度上京の建久六年、宗祖の命により、靑蓮院慈鎭和尙の許に於て出家、程なく宗祖の禪室に歸り、常隨十八年、宗祖の信任の特に厚かつたことは、建曆二年宗祖の御臨終に當り、遺訓一枚起請文を賜つたことでも知られる。（勅傳）一代の行狀隱遁的なこころの多かつたのは宗祖が遺弟に告げられた、「予之歿後、各々宜別住、不須共居一所、共居雖似和合、而又恐鬪諍、不如閑居靜處、獨行念佛也」（漢語燈錄卷十）といふのによるであらうが、勅傳に「たゞ隱遁をこのみ自行を本とす、をのづから法談などはじめられても、所化五六人よりおほくなれば魔緣きをひなん、ことごとしくてこゞめられなどぞしける。」といふ主張によるものであるといはねばならぬ。

南都や比叡山は貴族の入山に伴ふ經濟の潤澤なのに任せて、非常な勢力を有してゐたが、一般民衆は眞の信仰を求めて止まなかつたから新佛教の信仰は經濟的佛教を征服したかたちであつたともいへる。一體淨土宗に對する南北兩衆徒の迫害は屢々加へられたが、就中嘉祿三年の法難は特に有名であり、比叡山の徒は大谷の墳墓を破壞して、宗祖の遺骸を加茂川に流さんとした。然し幸にも遺骸は遺弟等により、ひそかに運び出され、西山粟生に於て荼毘に附せられ、危

くその難を免れることを得た。勢觀上人はその破却せられた大谷の房舍を文曆元年再興したので、これが知恩院の起源をなすものであることは今更いふまでもない。（一說曆仁元年）

鎌倉時代を通じて流れる精神は自主的精神が愈々充實してきたことである。賴朝は「我朝は神國なり」といひ、京都西加茂正傳寺の宏覺禪師は「すへのよの末の末までわが國はよろづのくににすぐれたる國」といふ國民自覺にまで進んだ。佛敎や諸種藝術にも自主的思想が漲るに至つた。されば鎌倉時代は人間性の自覺の時代であるとよくいはれる。然もその自覺反省は、現實的精神の横溢する近世初頭に於て見る如き、力强き人間意欲の自覺ではなく、人間無力の自覺で、そこに厭離穢土欣求淨土の思想もあらはれ、それに目覺めた當時の民衆は、武士も庶民も、淨土敎に歸せねばならなかつた時代精神の動向を見なければならぬ。もとより實際生活の否定ではなく、現實生活に於ける諸業をそのまゝ肯定してゐる。かくて鎌倉佛敎と民衆との密接な關係も自ら解せられるのである。

ともあれ、當時の民衆が眼前に展開された世相に對し、やゝもすれば生活の指導原理を失はんとするの時に當り法然上人の眞意を傳へ、よくその進むべき道を示し、社會人心を指導した三上人の行績は史上の偉大なる存在といはねばならぬ。